

中世文芸の地方史

出家遁世をし諸国漂泊中の身でありながら梵灯が使節として政務の連絡に当たっていたのは何故であろうか。和歌・連歌の名人としての声望はきわめて有用視されたであろうが、根本的には將軍足利義満近習としての前歴をかわれたものであろう。出家行脚はむしろ離俗の立場から政治へ還帰するものであった。

川添昭二

川添昭二(かわぞえしょうじ) 1927年佐賀県生。九州大学文学部国史学科卒業。現在、九州大学文学部教授。専攻、日本中世史。著書『今川了俊』(吉川弘文館),『注解元寇防塁編年史料—異国警固番役史料の研究—』(福岡市教育委員会),『蒙古襲来研究史論』(雄山閣),『鎌倉文化』(教育社),『中世九州の政治と文化』(文献出版)など。

平凡社選書71

中世文芸の地方史

1982年1月8日 初版第1刷発行

定 価 1800円

著 者 川添昭二

発行者 下中邦彦

発行所 株式会社 平凡社

東京都千代田区三番町5番地

郵便番号 102 振替 東京 8-29639

電話 東京 (03)-265-0451

印 刷 東洋印刷株式会社

製 本 株式会社石津製本所

© 川添昭二 1982 Printed in Japan

不良本のお取替えは直接読者サービス係まで
お送り下さい(送料は小社で負担します)

中世文芸の地方史

川添昭二

平凡社

目

次

序章	政治・宗教・文芸	7
----	----------	---

第一章	大宰府の宮廷文化	14
-----	----------	----

大宰府官人と天満宮安楽寺	14
年中行事の移入	16
宗教行事の移入	24
平安貴族の道真崇拜	32

第二章	神祇文芸と鎮西探題歌壇	41
-----	-------------	----

法楽連歌と託宣連歌	41
菅公説話と大江匡房	46
天満宮安楽寺と蒙古襲来	52
鎮西探題歌壇の形成	57

第三章	蒙古襲来と中世文芸	68
-----	-----------	----

蒙古襲来に取材した文芸作品	69
神戦	75
軍忠状としての『八幡愚童訓』	82

第四章	今川了俊の教養形成	93
-----	-----------	----

父・今川範国	94
師・京極為基	99
兼好、師・冷泉為秀	105
師・二条良基	114

第五章	九州探題今川了俊の文芸活動……………	124
-----	--------------------	-----

南北朝期の大宰府と文芸	124
九州下向前後	129

京都・九州・大陸	146
晩年の述作活動	170

第六章	連歌師朝山梵灯の政治活動……………	205
-----	-------------------	-----

將軍足利義滿の近習	206
出家行脚と上使下向	215

第七章	巡歴の歌人正広と受容層……………	228
-----	------------------	-----

大内教弘の時代	228
守護領国下の巡歴	235

第八章	宗祇の見た九州……………	251
-----	--------------	-----

大内政弘の社寺対策	251
領国支配と連歌	258

『筑紫道記』にみる支配機構	263
連歌神参詣	277

菊池氏と相良氏	284
宗祇と薩摩	294

第九章	九州文芸の展開……………	310
-----	--------------	-----

天満宮炎上と飛梅伝説	310
宗碩の九州巡歴	318

貴族と国人の文化交渉 328

第十章 大宰大貳大内義隆 351

実隆・宗碩・国人 351 月次祈禱連歌 358

宮崎宮の奉納和歌 371

あとがき 379

序章 政治・宗教・文芸

文芸（国文学）研究には、それ自体固有の研究目的・方法があり、歴史研究もまた同じである。よく、両研究を総合して高い学的理解を得る、ということがいわれるが、しかし、安易かつ不用意に接近しても成果はそんなに期待できない。両研究それぞれに、固有の研究目的・方法をぎりぎりに深めつつ、しかもおのずからその限界を克服しようという内的要請が真に自覚的に高まったところで接近がなされれば、両研究は質的な相互媒介を果たすであろう。本書はそのようなことを理想としながら、九州を単位に、中世文芸の史的展開を、歴史研究の立場から考察してみたものである。

使用する史料からいうと、文芸作品の利用はいうまでもない。歴史研究では常道であって取立てていうまでのこともないのであるが、同時に文書史料を利用した。わざわざ断るのは、中世文芸史の研究に文書史料が利用されることはあまりないからである。作家・作品に直接関係する文書の利用は文芸（国文学）研究の領域でかなり行われている。しかし個別的に存在する文書を収集して文芸の内外両面にわたる理解に資そうとする研究方向は、そんなに多いものではない。これは歴史研究固有の立場から文芸（国文学）研究に接近する方法として、いちばん明瞭なものである。歴史の正確な理解―大変に難しいことで、絶え

ず相対的な段階に止まるが—の中に作家・作品を定置するよう試みることに、これが、文芸の史的研究にあつて、歴史研究の側の果たすべき究極の責務であろう。

本書で取扱つた素材を時代別・階層別にみてみると、平安時代から戦国時代までを通じて大宰府天満宮・安楽寺を主な素材にしながら、平安時代では大宰府官人、鎌倉時代では鎮西探題、南北朝時代では九州探題、室町・戦国時代では大内氏を、それぞれ主題にすえた。九州の古代—中世文芸展開の枠組みを作るには不可欠だからである。民衆（名主以下）の文芸享受について、どこまで追えるか、その点の配慮もしているつもりであるが、それを史料的に検証することは、中世九州の場合、大変困難である。今後の課題とせざるをえない。

大宰府天満宮・安楽寺を一貫して主な素材にしたのは、同宮寺が古代—中世九州文教の、いわば淵藪的役割を果たしていたからである。同宮寺が関係史料に恵まれているのは、当然のことである。同宮寺に対する大宰府官人・九州探題・大内氏等の文化的・政治的なかわりの中で、その文芸状況の推移をみてみた。広い意味での「政治」の文芸に与える規定性がどのようなものであるかを具体的に追究してみた。このような方向は、中世文芸の史的研究にあつて、必ずしも的はずれだとは思わない。作品の内実を規定する因子の抽出にかかる、むしろ重要な視点だと考える。宗祇の『筑紫道記』など、そのような視点での説明が期待される典型的な素材である。更に、『野守鏡』などにみられる、和歌は治国の要とするような中世文芸特有の理世撫民体は、九州においては九州探題や守護の領域的支配を、文芸の面から、いわば内面的に支えた。和歌・連歌は陀羅尼（心敬『やわめい』と）、あるいは狂言綺語の類はすべて讃仏乗の縁、つまり文

芸は宗教へ昇化すべきものであるという中世文芸の理念は、譬喩的にいえば、九州探題や筑前守護大内氏の支配の維持・拡充のための法案となった。宗教性を媒介とする文芸と政治の一体化がみられるのである。天満宮安楽寺文芸の展開にあつて特徴的なことは右以外幾つかあるが、その中の宗教的側面に即して、宮寺側の神託連歌・神託和歌、それらの注進をうけての京都における同宮寺神託詩歌など、神託文芸が主調音になっていたことを挙げておきたい。社寺として、当然といえば当然であるが、社寺としてはその永続・繁栄の祈りの文芸的表現であつたといえる。神託連歌は連歌説話として増幅し、飛梅伝説などを含みつつ天神信仰を拡大していった。連歌説話形成史の研究は、中世文芸研究の一つの課題となろう。総じて、天満宮安楽寺の文芸が神祇文芸研究の主要素材の一つになることは、いうまでもない。

第一章では、平安時代天満宮安楽寺における年中行事・宗教行事の始行・展開を考え、大宰府長官による宮廷貴族文化の直接移入であつたことを述べた。大宰府官人たちは大宰府赴任に伴う京洛喪失を同宮寺において回復していた、といえよう。在地文芸の自生的展開は、ほとんど検証できない。第二章では鎌倉時代の九州文芸をみてみた。鎌倉時代九州の文芸資料の大半は天満宮安楽寺関係であり、鎌倉末期には鎮西探題府を中心とする歌壇など、文芸の自生的展開がみられる。鎌倉時代の天満宮安楽寺文芸資料で顕著なことの一つは、説話作品に同宮寺関係記事がみられることである。前述の神託文芸に関連して考えてよからう。

蒙古襲来の文芸史的な考察はほとんどないので、第三章として立ててみた。鎌倉末期における社寺とおしての中世日本人の意識―信仰構造は、異国降伏のことによって規定されたといっても過言ではない。

全国的規模で行われた異国降伏にまつわる社伝・寺伝は祈禱ならびに唱導行為等を通じて民衆の意識に内在化していった。その文字化されたものの一つが『八幡愚童訓』である。本文で述べるように天満宮安楽寺にも蒙古襲来関係の文芸的所伝がある。蒙古襲来を契機として九州の政治的世界は大きな変化をみせる。鎮西探題の成立によって政治の中心が博多に移され、大宰府は天満宮安楽寺を核とする伝統的な文教の側面が残された感が強い。南北朝時代に入って征西將軍懷良親王や九州探題今川了俊によって政治的權威の復権が行われる。博多は政治的には北条氏による九州支配の拠点としての性格を強め、文化的には対外交渉と不離な関係に立つ禪寺文化の色彩を濃厚にしていた。鎌倉後期以降の中世北部九州の文化は大宰府と博多を中心とする二元的性格を明らかにしていた。これが、以後の中世九州文芸展開の規定軸となる。鎮西探題北条英時を代表とする鎮西歌壇は、鎌倉後期九州文芸の中心的役割を果たし、鎌倉歌壇・下野宇都宮歌壇・京都六波羅（探題）歌壇とともに、当時の武家歌壇の代表的位置を占めた。

南北朝時代九州探題今川了俊の活動は、政治・文化両面にわたって、ことにぬきんでている。第四章で、今川了俊の九州探題赴任以前における文芸教養修得の過程について述べ、第五章の考察の前提とした。

今川了俊当時、室町幕府が全き政權たりうるには、ただ一つ南朝方の隆盛を許している九州を制圧しなければならなかった。今川了俊は九州経営に従うこと四半世紀、その内容と経緯については種々問題もあるが、宮方を制圧し、九州経営の側面から室町幕府権力の確立を推進した。今川了俊は和歌・連歌・故実等にすぐれ、武家でありながら冷泉歌学^(数奇)についての体系的な諸著を残している。九州探題在任中、明日をも知れない軍陣行旅の間にあって「真実^(数奇)すぎ人などはいくさの中、嘆の中にも、よむげに候」(了俊一子

伝」と、きびしい作歌態度と研究精神を堅持し、あわせて九州の文芸愛好の士に不断の指導を行って著作活動もし、晩年における旺盛な文芸活動の基盤を整えた。九州中世の文芸の型を、かりに、下向・移入型と在地・自生型とに分けるならば、今川了俊は前者の型でありながら後者と不可分であったといえよう。今川了俊は、広義の政治を媒介としながら南北朝動乱の状況にあつて京都文芸（文化）と九州文芸（文化）の諸関係を典型的な形で示している。以上のことを第五章で詳述した。

第六章で取扱った朝山梵灯（師綱）は、離俗法体、西行の規矩を追う漂泊の連歌師と目されているが、將軍足利義満近習としての属性あるいは前歴と不離のものであった。朝山梵灯が將軍派遣の使節として九州に下向したこと、それが朝山梵灯の連歌に与えた影響、朝山梵灯・朝山重綱の九州連歌に与えた影響などをみ、梵灯の伝統的文芸政教観を「近習」に即して述べてみた。

第七・第十章は、主として筑前・豊前守護ないし大宰大貳大内氏と九州文芸の展開との関係の究明を中心にしている。この四章の主眼とするところは、端的にいえば、大内氏を主な素材とする守護領国文化の解明にある。守護の領国支配における、文化に対する規定性の追究である。追究の主柱として次の二点をあげる。(1)守護の領国支配、とくに社寺に対する保護と統制の問題である。これは逆にいえば、社寺にとって守護は何であったのかという問題である。(2)守護の領国支配に対抗的に内包されている国人領主制の文化的側面（国人文化）の究明である。四章にわたる叙述は、これらを索引として室町期守護・国人文化の特質を明らかにしようとしたものである。従って、ここでは具体的な事例はあげないが、(1)に関していえば、大内氏の筑前支配に画期をなす大内教弘期に「祈禱連歌」（太宰府天満宮文書「宝徳元年」一四五〇）

二月廿三日筑前守護代仁保加賀守盛安宛大島居信頭書状）なる用語が初見することは象徴的である。寛正五年（一四六四）、大内教弘に招かれ、大宰府天満宮参詣を主目的とする歌人正広の事例に具象的にみられるように、京都文化の九州への移入は大内氏の拠点山口を媒介にしており、大内氏の在京性―京都志向は分国筑前の経済的・文化的拠点である博多の小京都化を推し進めていった。いっぽう、在京十年、大内義興が管領代として幕政に実権を振っていった永正年間から京都貴族と九州国人との文化的・経済的交流が高まっていた。その理由について解明の展望を十分にはもっていないが、(2)に関連することで、国人領主制理解に不可欠な側面であることは確かである。

京都文化の九州への移入、京都・九州文化の交流等、つまり京都貴族と九州の守護・国人との文化的・経済的交流の媒介項になったのが、守護の保護を背景とする正広・宗祇・兼載・宗碩等、著名な歌人・連歌師の九州下向である。文化の型でいえば、典型的な中央（京都）文化の移入、下向型である。彼らの九州下向は、文芸プロパーでいえば、文道の神・連歌の神菅原道真を祀る大宰府天満宮安楽寺への参詣を主目的としており、旅のもつ自照性を通して文芸人としての自己形成をはかることにあった。そして、彼等は、結果的にいえば、文芸（文化）の地方伝播に大きな役割を果たしたのであり、各地域（直接的には国人）の文芸（文化）にかかわる志向を結集し、高めたのである。地方文芸の自生的展開に対する彼等の触発度は、現在からの想像をはるかに超えるものがあつたろう。

彼等は、それぞれの旅を紀行文・歌集・句集等の形にまとめており、そこでは各地域での国人との文芸交歓が詳しく記されている。報告をうけた守護（大内氏）は、文芸面での喜悦にのみひたっていたわけで

はなからう。それらは、一種の政情報告書だといってよい。そのような意味で政治と文芸は一如であった。前述の(1)、(2)を、合わせた形で典型的に示しているのが、小島居文書天文四年(一五三五)十月七日月次連歌人数注文である。これはつまり、筑前守護大内義隆による国人支配の神祇・文芸的表現であった。

注

- (1) 大宰府天満宮安楽寺の古代・中世文芸資料は編年整理し、注解と研究を加えておおよけにしている(『大宰府天満宮連歌史資料と研究』Ⅰ・Ⅱ、一九八〇年三月・一九八一年三月、大宰府天満宮文化研究所)。

第一章 大宰府の宮廷文化

一 大宰府官人と天満宮安楽寺

大宰府は「悉く朝廷に同じ^①」といわれ、八世紀万葉時代における九州の文化・文芸の淵藪であった。九州におもむいた万葉時代のみやこ人は、ひなとしてのつくしを万葉の世界に創造した^②。防人の歎きを代償にしていることはいうまでもない。九世紀における大宰府は、概して内政・外交に忙しく、文芸面での事績には、みるべきものが少ない。十世紀に入ると、菅原道真終焉の地が祠廟・御墓寺として天満宮安楽寺となると、それまで大宰府が担ってきた文化的機能は、大宰府官人自らの手によって天満宮安楽寺に移行されていった^③。

本章では、平安期十～十二世紀を対象に、大宰府官人と大宰府天満宮安楽寺との関係を中心として、平安期地方文化の性格について若干の考察を試みたい。ここである大宰府官人は、主として大宰府に赴任してきた権帥・大貳以下、監・典までを指すが、実体としては権帥・大貳級の長官―中央貴族について述

べることが多い。また、天満宮安楽寺は、安楽寺天満宮あるいは安楽寺聖廟などといい、天満宮と安楽寺とは密接不可分の関係にある。菅原道真の没後、延喜五年（九〇五）をさかのぼらぬ延喜年間、味酒安行によって建立された菅原道真の祠廟・御墓寺である。現在の天満宮境内から奈良時代の様式をもつ古瓦が出土していて、天満宮より以前に寺院が存在していたと推測されるが、菅原道真の御墓寺としての安楽寺は右に始まる。安楽寺は明治初年の神仏分離・廃仏毀釈で神仏混淆の祭典が廃止・整理され、神社―（新）天満宮となるまで（旧）天満宮と団体であった。天満宮安楽寺は、古代における史料的表现としては、主に安楽寺としてあらわれる。本章では、一般的には天満宮安楽寺と記し、その都度史料的表现に従って表記する。

天満宮安楽寺は菅原氏の私廟・私寺（氏寺）として出発し、安楽寺初代別当職は菅原道真の子孫から氏牒をもって選ばれた。これ以降同寺別当は代々菅原氏から選ばれるが、二代別当鎮延は天徳三年（九五九）太政官符をもって補任され、安楽寺は早くも官寺的性格をもつに至った。安楽寺は宇佐八幡宮などと異なつて、十世紀に入ってから建立された新興の私的寺院であり、その発展のためには大宰府との結び付きが強く望まれた。安楽寺が官寺的性格をもつに至ったことは、大宰府の保護を得るのに好都合であり、天神信仰の普遍化―隆盛と相まち、大宰府官人として赴任してきた中央貴族達は堂塔を整備・建立し庄園を寄進するなどして天満宮安楽寺に厚い保護を加えた。また、永観二年（九八四）、円融天皇の御願によって常行堂が建立されたのを始めとして、朝廷の保護も加えられる。寺領は大宰府官人たちの相次ぐ寄進等によって急速に拡大し、数十町から百数十町に及ぶ庄園三十余箇所、末寺・末社も数箇所に及び、宇佐八幡宮・